

ける。北海道登別付近。(幌別漁村生活誌)

ワミウジ 輪虹。日月に暈のかかるもの。高知県。

イタチビ 朝日の光が黄色くみえるとき。雨の兆である。長崎県飯ヶ浦村。

ソコボシ 光のない星。ソコボシが出ると雨になる。長野県上伊那郡。

ヒノノキ またシノノキ。日の軒で眞晝のこと。(頸城方言集)新潟県西部頸城地方の海岸1部でいう。

アケクレ 日中ではあるが夕方近い時刻。(鳥取方言集)

ムコダマシ 夕照。広島県比婆郡峯田村。

ヒハヅリ 日が山に入ること。またその時刻。(ひだ人6巻11号)岐阜県大野郡岩井谷村。

ウバコロシ 遠山の頂にのこる夕映。隠岐島前。(高志路7巻7号)

ガマガトキ 夕方のこと。飛騨高山にて。「カガモ」すなわち幼児が化物をいう言葉と関係があるらしい。

アコクノコ 夕暮。熊本県葦北郡。その他ヒクレマダレ、ケソメキなどの語がある。

イチノクラミ 夕方薄暗くなるころを鳥取県八頭・気高郡地方でいう。節分の日のイチノクラミに書物をよむと鳥目になるという。

ヨイイチ 日没後2~3時間をいう。隠岐島後。この時間は非常によくイカがつれるのでイカの宵市かといわれる。

イドホリボシ 雲の間にポッポッと星がみえること。翌日は雨。静岡県榛原郡・小笠郡。

メクラボシ 雲にすかしてぼんやり星がみえる。これも同地方で雨の兆。

ヨノキ 月で夜景がみえること。新潟県村上地方。

ヤッコビヨリ 晝間降って夜晴れる天気という。下男が労働しなくてすむからであろう。(大阪府泉北郡)

オヤカタビヨリ あるいはオヤカタジナミ。シナミも日和のこと。ヤッコビヨリの対語で、夜降って晝晴れるからである。

オウビ 上天気のこと。朝曇りはオウビのもと。(防長史学2巻1号)

ソラヅキヨ 空が曇っているながら月のため明るくみえる夜。長野県南佐久郡。

キノメツワリ 木の芽が出るころの暖くだるいような気候を、奈良県宇陀地方でいう。ツワリは生気がめぐむ

こと。

ティルハンニ ティルは背負籠、ハンニは「かるう」すなわち背に負うことで奄美大島で季節の名。野原から籠を負うてかえるとき、ブリーという星(すばる)が額越しに山の端にみえるのである。麦まきの季節おそろくこの籠は負紐を額にかけ、うつむいて負うのであろう。この地方の運搬法はアイヌとにている。

ヨメオドシ 旧8月ころ急に寒くなる気候をさす。大分県築上郡。

ウバオドシ 佐賀市付近で同じ気候にこの名がある。ショビタレオドシ 新の9月上旬に23日急に寒い日がつづくのをいう。三重県志摩郡。(郷土研究7巻6号)

ピッタレオドロカシ 11月の初に時ならぬ雪が一寸降ること。島根県邑智郡田所村。このころは稲も刈らねばならず、麦もまかぬばならぬ忙しい時である。ピッタレはなまけること。

シモアゲ 霜のはげしい朝。快晴でひるころから曇るのをいう。熊本県玉名郡。

クロシモ 冬の朝、雲があつて霜がおりぬがしかも寒さのきびしいのをいう。鹿児島県大隅半島高山地方。

ブリオドシ 能登半島七尾地方で11月中旬から下旬に北風が一荒れあれて木の葉をゆり落すころ、ぶりがとれだす。雷が鳴り、みぞれが降って寒い。

ドンクビヨリ 寒中であるが生暖かく薄曇った日をいう。阿蘇地方小峯村にて。(肥後方言集)天草島にもこの語があるらしい。ドンクは曇ること。

ドロカン 寒のうちに丑の日が3回あるのをドロ寒といい、寒中暖いという。秋田県平鹿郡十文字町。

ジカン 次寒また地寒などと書く。寒明けて30日を余寒、その後30日を時寒という。これより鮮来ると北海道松前、福山地方でいった。(千鳥の磯)また同じころ八郎瀧の漁人は春分より清明のころまでを地寒といったとある(氷魚の村君)が、遠く千葉県印旛郡の東部でも寒明けから彼岸前後までをさしてジカンと呼んでいる。(旅と伝説13巻11号)

〔追記〕 民俗語彙は発音通りを原則としたが、発生系統によって理解するためには歴史的かなづかいによる方が適当と考える。記述に現在形をとったのは調査された当時使用されていたものであって、現在死語となったものもあろう。(信州大学地理学教室)

書評

Klimat Iaponii. G. N. Witwitskii
13×20 cm 175頁 1954年 Moscow 290円

一般的な解説をした日本に関する気候誌。図は新日本気候図帖・雪の気候図帖・大後編農業気象図便覧などからとり、動気候的な説明は Thompson (1951) の南

東アジアの研究から多く引用している。われわれに新しい知識を別に与えるわけではないが、文献や資料の代表的なものを日本の1950年、ソ連・ドイツ・イギリス・アメリカのは1952年位まで殆んど集めていて、逆にソ連の気候誌を日本の学者が書こうとする場合を一考せざるを得ない。(mlk)